海老名市の話題

市内で温泉掘削 成功するか

小田急電鉄(株)が海老名駅横のビナガーデンズパーチ隣で、温泉掘削を進めている。「ウェルネス」などのコンセプトに沿った事業で7月から始まった掘削は深さ600mに達した。11月まで工事が行われる。

ビナガーデンズは2019年と20年に31階建てタワーマンションが相次いで完成。22年にはビナガーデンズパーチが竣工した。温泉掘削の現場はその隣にあるものの、公式発表はなかった。

同社によると深さ1500メートルの掘削許可を受けて専門業者が施工しており、掘削した穴が崩れないように金属のパイプを溶接でつなげながら挿入している。深さは8月下旬に600メートルに到達。今後も掘り進めるという。

この事業はビナガーデンズパーチのコンセプト「ウェルネス」などに関連づけ、地域の価値を高めようと着手したもの。掘削の途上という事もあり、同社では「温浴施設になるかどうかも含めて未定」としている。

県内で温泉といえば箱根や厚木などが知られるが、火山の熱による温泉と、長い年月でしみ込んだ地下水や海水などが地温で温められる温泉がある。

県温泉地学研究所（小田原市）によると「おおむね100メートルを掘ると2～3度ほど温度が上がり、深さにもよるが帯水層や岩盤の亀裂などに溜まる傾向にある」とのこと。

同研究所の調査によれば、150メートルの深さで40～50度ほどの温度になり、汲み上げられるまでに若干温度が下がるという。千メートル以深のいわゆる「大深度」温泉は近隣にも海老名市柏ケ谷や座間市広野台にあり、民間温浴施設で利用されている。■

小田急と大分県は深い縁？

海老名市めぐみ町にある小田急電鉄の博物館「ロマンスカーミュージアム」で、7月17日から8月26日まで、大分県やJRとのコラボレーションイベントが開催された。

期間中は「温泉×特急でサマートリップしよう！」と題して、大分県とJR九州をテーマとしたジオラマの設置や大分県特産の柑橘類「かぼす」を使ったサイエンス講座の開催、大分県応援団鳥であるゆるキャラ「めじろん」の来館など、様々な企画が実施された。

◇大分県人が生んだ小田急

小田急電鉄が設立されたのは1923年のこと。その設立者は大分県人の利光鶴松という実業家だった。1923年に電力事業で得た利益を元に小田原急行電鉄（現在の小田急電鉄の前身）を設立、初代社長に就任した。

◇新東京の新たな観光・通勤路線

小田急は1927年に新宿－小田原の小田原線全線、1929年には江ノ島線の全線を開通させる。当時の首都圏の私鉄路線は軌道線（路面電車）や軽便鉄道として開通して都市化とともに鉄道線へと衣替えしたものも少なくなかったが、小田急は当初から高速の都市間鉄道として計画されており、大部分が複線電化されていたほか、急行・快速運転に対応した配線で造られた駅が多かった。

小田急はわずか2年間で現路線の大部分が一気に開業したため、沿線は新東京の新たな観光・通勤路線として脚光を浴びた。

◇大分県人が成長させた小田急

戦後、小田急を成長させたのも、利光と同じ大分県人の安藤楢六だった。小田急電鉄は1942年に東横電鉄などと合併して「大東急」を形成していたが、第二次世界大戦後、1948年に小田急が再び分離・独立した際に初代社長に就任したのが安藤だった。

安藤は小田急の復興を推し進めるのみならず、戦後の発展のなかで更なる多角経営化を図り、小田急を成長軌道へと乗せた。

◇現在でも人気の観光ルート完成

一方、1920年より箱根で観光開発を行っていた西武グループは1947年に小田急（当時は大東急）傘下の箱根登山鉄道と開発競争で争いも起きたが、その後和解している。今は「ロマンスカー＋箱根登山鉄道＋箱根ロープウェイ＋箱根観光船」の観光ルートで大きな人気を集めている。

現在、大分県内の各社はいずれも小田急グループとの資本関係や提携関係を解消しており、今や大分県内において小田急グループとの繋がりを見つけることは難しい。

今回のイベントを通して関連グループの関係が深まり、新たな交流が生まれることを期待したい。■